

第5回文化セミナー（小田原市文化政策課主催）

—学芸員の仕事と場の関わり—

講師：広島市現代美術館学芸課長 神谷幸江 に参加して

小田原出身の神谷幸江さんは、広島現代美術館で新たな企画を発信し続け、2011年には、「サイモン・スターリング」展で西洋美術振興財団学術賞を受賞されたキュレーターである。まだ美術館を持たない小田原市であるが、3年後に完成する「創造文化センター」の活用のヒントを得たいと、講演会に参加した。

大学で美術史を学び、絵は描けないが絵を学ぶことに興味を持ち今の仕事に行きついたという神谷さんは、東京芸術大学大学院で美術史を学んだあと、オランダアムステルダム美術館とアメリカニューヨークのニューミュージアムでのキャリアを持っている。伝統あるヨーロッパ美術と新しさ自由さの代表ニューヨーク、欧米での実務を積んでこられた稀有なキュレーターだ。

広島を例にとって美術館・学芸員の役割についての具体的な話は、大変に興味深いものだった。

原爆ですべてを失った広島にとって、人々が力強く踏み出すために美術館が不可欠なものであったという出発点が、広島にはあった。ヒロシマ賞では広島でしか作れない作品の展示をしてきた。北京オリンピックの花火のデザイナーをした蔡國強（ニューヨーク在住）の50メートルの曲面に火薬を爆発させて作る作品『死せる自然』（2008）や、オノヨーコによる『希望の路』（2011）という音楽とのコラボインスタレーションの紹介があった。

ここでは、今までは美術館ではやれなかったことを形にするという大胆な企画を実現させた。現代アートに関心を持ってもらう理解の窓口としてのパフォーマンスがあった。印象派はわかるけど現代アートはわからないという人々も、何度も何度も見てもらうことで慣れてくる。「これはアート？と関心を持ってもらうこと」「固定概念を覆す展示」「日常の視点を変えてくれる展示」という言葉で、まさに現代アートを伝えていた。

ご自身の企画した展覧会のほか、特色ある企画展の作家を訪ねることを毎日の体力づくりのように行って作り手の情報をキャッチする努力も怠らない。

創造文化センターの完成後の私たち市民一人一人が、その場をどのように活用し文化を享受をしていくのか、また外部から多くの方を呼び込むことが出来るのか、市民としてどんなサポートができるのか、真剣に考えることのできた貴重な時間となった。

美術館は、かつての「美の要塞」として保存鑑賞するという役割から、体験して考え体現する場所、都市の開かれた場所として外も内も変わっていくというこれからの美術館のあるべき姿が、神谷さんのお話から浮き彫りになった。その中で、「キュレーターのミッション」は、「水を満たしていくように運営する役割」とご自身を現した。物の展示だけではなく、社会と表現をつなぐ媒介者として、社会とのつながりを広げる役割を担うキュレーターの発信力に、私たちももっと注目をしていきたい。

（新九郎友の会 木下和子）



『ようこそ松永記念館』 第4回松永記念館交流美術展「清雅なる原三溪の書画—旧松永コレクションから—」

本展は、三溪園のご協力を得て、原三溪（富太郎）自筆の書画のうち、松永記念館の設立者・松永耳庵（安左エ門）がかつて所蔵していた作品（旧松永コレクション）をご紹介します。

耳庵が敬愛し親しく交流した原三溪（富太郎）は、実業家として、また、益田鈍翁（孝）や耳庵とともに「近代三茶人」の一人として知られます。三溪の母方の祖父が南画家の高橋杏村だったこともあり、三溪は幼い頃から、おじ（杏村の長男）に絵の手ほどきを受けたといひます。事業のかたわら筆をとり、書画をよくした三溪が残した作品は、生涯で千余点にも及びます。その画は花鳥や旅先の風景を描いたものが多く、漢文の素養もあった三溪は、しばしば画に関連した詩や讃を画中に認めています。

展示作品の一つで、三溪から耳庵に贈られた「蓮華図」（昭和12年）は、蓮を好んで描いた三溪の画のなかでも一番の大作で、琳派の画風に学びつつも、独自のおおらかさを湛えた作品です。

日本画家・前田青邨が「原さんの絵は何んといふか、調子の高い、個性のはっきりした、専門家には絶対に描けない画であった」と称えた三溪の書画、ぜひこの機会にご覧ください。

松永記念館学芸員 中村暢子

会期 平成26年10月25日（土）～11月24日（振休・月）

時間 9:00～17:00 観覧料 一般300円

「蓮華図」（昭和12年）

高校生以下、福寿カード提示者のかた、障がい者手帳をお持ちのかたとその介護者のかた（1名）は無料

絵てがみ折々 —小田原の暮らしの中で—



野地 三恵

大磯の照ヶ崎海岸に、海水を飲みに来るアオバトがいるという話を聞いて久しい。その青い鳩を一度見てみたいと思っていたが、この夏の早朝、思いがけず出かける機会があった。

港の堤防の上が観察スペースになっていて、目の前に磯が広がっている。そこで双眼鏡を構えて待った。大磯丘陵から、幾つかの群れが盛んに飛んでくる。体の色は青というよりは黄緑色で、それが朝陽に照らされて輝くさまはとても美しい。上空を旋回して、しばらくすると岩に降り、窪みに溜まった海水を飲んでいく。波しぶきを浴びながら岩を移り、やがて群れは帰っていく。10月頃でアオバトの飛来は終わるといふ。また来年。

9月のこと

※女流展ではSさんの「風化」という作品が印象に残った。全体に落ち着いたトーンで品のあるグレーの地にわずかな黄と赤の配色、ストライプ、鉛筆の引っ掻いた線、トタンに浮かぶ錆びの美しさを感じさせるような絵だった。

※水曜会は毎年故柏木房太郎先生の絵が展示されるのが楽しみのひとつである。地元箱根をはじめ地方を訪ね美しい風景画を多く残した。水曜会のみなさんに思い出を色々とお聞きした。仕事が無かった時、一緒に歩いてくれて就職先を世話してくれたこと。入門の時持参した絵をみて「絵は下手でいいんだよ。すぐ上手くなる人はやめてしまおう。長く続けてゆっくり上手くなればいから」と人を見て優しい教え方をした。皆さん様に温厚で優しい氏の人柄を懐かしんでいた。昔、先生のコレクションを誇らしく語る人がいた。西相美術協会会長も務められた先生は小田原で最も愛された画家の一人だろう。作品はご家族が大切に保管されているが、小田原市の重要な美術作品として市に収蔵されることを願う。

※清閑亭では「面白い技術」という若い現代アートの作家のグループ展があった。地域出身の彫刻家のつながりで、武蔵野美術大学、京都市立芸術大学、大阪芸術大学出身の30歳前後、8人の作家が参加した。歴史ある静かなたたずまいの日本家屋に現代アートがふしぎとマッチしている。作家として中央で発表する事は欠かせないが、ゆかりある地方とのつながりも大切にしてほしい。今回の試みは作家自らが行動し実現したもので意義があると思う。西湘地域にも中央で発表する優れた作家も多勢いる。合わせて地域での発信も増えてくると楽しみである。Ⓜ